点も欠かせないのである。なぜ，博物館が必要とされるのかという重要な問いに向き合うことと同様に，支援する意思を持つあらゆる立場の市民が，どのような関わり方ができるのかについて，具体像を描いていくことも，今後は求められてくる。

支援者としての博物館設立／存続のための活動枠組みは，利用者としての意識を持ちながらも，日常的な活動への積極的関与ではない。したがって，緊急性のある課題が生じた時に，顕在化される性質を持つのであり，博物館活動総体からは，図4-5のような位置に示すことができる。

3-3 非営利組織

前章で取り上げたように，近年は，非営利組織で活動する市民の博物館活動への関わりが，より顕在化・認知されつつある。その形式は，博物館と共催する事業活動であったり，非営利組織の活動に博物館が関わっていくことであったり，様々である。ここでは，2つの活動枠組みを具体的事例に取り上げる。1つ目は，非営利組織の日常での事業活動において，博物館と関わっていく活動枠組みの事例である。2つ目は，美術館活動と子どもたち（学校教育）とのコーディネートに特化した事業を行う非営利組織の事例である。

(1) NPO子どもネットワークセンター天気村[9]

特定非営利活動法人NPO子どもネットワークセンター天気村（以下，「天気村」と略す）は，「子ども達の取り囲む環境を考え直そうと，1987（昭和62）年，子ども，大人，障害をもつ，もたないに関係なく，子ども達の周辺に起きている問題解決にいろいろな方面から関わる任意団体『天気村』」として設立されている。具体的には，「野外活動体験，障害児・健常児との交流，小・中・高生のボランティア育成，まちづくりワークショップ，子育て支援セミナー企画など」の事業活動の実績がある。アンケート調査への回答は表4-5にまとめられる。

2001（平成13）年から，滋賀県立琵琶湖博物館と連携した活動が始まった。活

表4-5 NPO子どもネットワークセンター天気村

市民連携が始まった時期：2001（平成13）年
連携先
滋賀県立琵琶湖博物館
活動内容
草津（地元の祭り）の祭りの会場になった小学校体育館にて，博物館周辺で実施体験されている投網をして頂いた。投網をみんなで編みました。又，昔の暮らしの再現でもちつきをして食べました。
活動場所
草津小学校体育館，里山（滋賀県栗東市，金勝），滋賀県近江八幡市
参加者（具体的に）
ボランティア活動者，これまで博物館と接点が無かった方たち，団体の会員 祭り前に地元小学校にチラシを配って頂いた。子どもたちの親，祖父母も懐かしい感じで来られました。
市民連携の背景・理由
①日頃からNPOとして子どもたちの体験を充実させるため，農，林，漁業や商業など仕事にたずさわっておられる方々とはネットワークを深め企画等お世話になっています。祭りの時に，一般市民の方に，漁法に興味を持って頂きたいと思い，又，そのことで今問題になっている外来魚駆除のこと，水質汚染のこと，よし刈りのこと等パネル展示をさせて頂き，啓発に努めた。 ②やはり，学芸員の方から専門的な話をお聞きしたかったので。
役割分担
できるだけ日々の暮らしの延長線上に博物館があるようにしたいので，何か疑問や発見があれば，放課後にでもすぐNPOに連絡が入り次第，その疑問はすぐに連携先の学芸員の方へ。その答えはできるだけ近日中に企画を立て博物館へ行くようにしています。
他に連携している組織・団体
びわこバレエ自然塾，守山漁協，シルバー人材センター，ウォーターステーション，金勝森林組合，草津市商店街
課題
博物館が身近なくらしの延長線上になればいい。市民学芸員として，身近な情報を発信したいし，身近な場所で街カド博物館ができ，子ども市民学芸員として発表してくれるようになればいいかなと思っています。
市民連携とは
1＋1＝∞というイメージ。何か新しいものがうまれる，新しいサービス・おもしろいサービスを想像できる。融合のマジック。市民活動の科学実験をくりかえしているようなもの。

出典）アンケート調査への回答をもとに筆者作成

動内容は，「日常的な利用者の仲介」と「地元の祭りでの投網体験や昔の暮らし再現などのイベント」が挙げられる。地元の祭りでの投網体験では，一般市民が漁法に興味を持ってもらい，現在，問題になっている外来魚駆除，水質汚染のことなどについてもパネル展示をする取組みが実施された。連携をしていくことになった背景は，２点ある。第１は，日頃からNPOとして子どもたちの体験を充実させるため，農・林・漁業や商業など，仕事に携わる方とのネットワークを深め，企画などで協力を受けている点である。天気村という組織自身が，暮しとのつながりを感じながら，大切にしなくてはいけないことを守り，そのために，何をすればいいのかを行動に移し，考えるという姿勢を持っていることともつながる。第２は，学芸員の専門的な話を聞きたかったからである。博物館という対象については，「できるだけ日々の暮らしの延長上に博物館があるようにしたい」との思いを持っている。したがって，何か疑問や発見があれば，放課後にでも，すぐ，天気村に連絡が入り次第，その疑問はすぐに連携先の学芸員の方へと伝えるようにして，近日中に企画を立て，博物館へ行くようにしているという。

また，博物館と連携することの意義は３点ある。第１は，裏づけを知り，地に足がついた活動ができる点。第２は，お互いを知ることができる点。第３は，必要な情報が正確に早く入るという信頼性がある点である。博物館の社会的価値として，活動を支えていく拠りどころとなる情報を提供したり，資料・情報を活動の中で効果的に使っていくための手段を共に考えていくことができる点が指摘できる。もちろん，そこには資料と人の双方に日常的に接する専門家としての学芸員がいることが大きく影響している。

今後の活動展開として，子どもたちが，市民学芸員として身近な情報を発し，身近な場所で街角博物館ができ，発表してくれるようになることを望んでいる。

(2) 子どもの美術教育をサポートする会(10)

「子どもの美術教育をサポートする会」は任意団体として，1999（平成11）年

表4-6　子どもの美術教育をサポートする会

市民連携が始まった時期：1999（平成11）年
連携先
滋賀県立近代美術館，滋賀県立陶芸の森，滋賀県立琵琶湖博物館，MIHO MUSEUM
活動内容
小・中学校にて授業として美術館・博物館との連携を実現するためのコーディネートをしている。今まで5,000名の生徒に実施している。公民館の子ども事業とも連携。
活動場所
小・中学校，保育園，公民館
活動への参加者
ボランティア活動者，これまで博物館と接点が無かった方たち，団体の会員
参加者（具体的に）
主婦，教育関係者，会社員，大学生
市民連携の背景・理由
全ての子どもに平等に本物の芸術に触れる機会を与えるためには，学校とミュージアムの連携しかないと思い６年前より１人からスタート。全く組織として地盤のなかった状況から，今は予算もとって下さるまでになっている。
役割分担
コーディネートとプログラム実施の子どもへのサポート役
課題
学校関係者対象の美術館での研修が評判で昨年は150名口コミで集まり，今年も予定している。今は，各学年対応の美術館ごとのプログラムづくりの検討プロジェクトを進めています。
市民連携とは
「市民連携」という言葉は使ったことがないしあまりピンとこない。とにかく現場に来て活動してみると，本当にさまざまな組織のそれぞれの事情の中でできることは違うので，ひと言では言えないものですね。
博物館と連携するにあたって必要な考え
「win-win（筆者注：双方が満足できる／メリットがあること）」，「両者の喜び」。双方にとって，あくまでプラスとなることであるという活動であること。大切なのは「相互理解」。だから，コーディネート役が必要です。
意義
「文化・芸術」が次世代教育に重要なものであるから，子どもの心を育てるのには本物の美に触れることです。

出典）アンケート調査への回答をもとに筆者作成